

天文語彙

(う)の部……………(續き)

ウインネツケ彗星(Winnecke's Comet) 一八五八年

三月八日獨逸のウインネツケが発見したものである。軌道計算の結果之は一八一九年のボンス(Tons)彗星と同一である事が解つた。木星族の一つで週期五年十一ヶ月弱。此星は其後一八六九年、一八七五年、一八八六年、一八九二年、一八九八年、一九〇九年、一九一五年の七回に出現した。次ぎは一九二一年(大正十年)の豫定である。

ヴェガ星(Vega) 琴座アルファ星。赤經一八時三

四分、赤緯北三二八度四一分、光度〇・一、分光型A。支那では之を織女と稱へ、天の河を挾んで牽牛と相對し、美しい七夕のローマンスを以て聯想された。夏の夕方天頂に輝き北天第一の巨光を放つ。距離は二〇・四光年(七夕を見よ)

ヴェスタ(Vesta) 小遊星第四號、一八四七年オル

パス(Olbers)の発見したもの。此星は小遊星中光度及びアルベードが最も大きい。好都合の衝の時には應々肉眼で見わる。直徑凡四百軒(百里)。

つぎざ魚座(Pisces) 動物圈上の一星座。アンドロ

メダ及ペカンス座の南、牡牛座の西、鯨座の北にある。十一月の夕方南中する。此星座は頗る古くバビロンの古記録にも出て居る。太陽は毎年三月十日に此星座に入り。四月二十日に去る。アルファ星だけが三等星で他は皆微光星である。春分點は現今此星座中にある。

ウォルフ(Max Wolf) 獨逸ハイデルベルヒ大學教

授。初めハイデルベルヒに私立天文臺を經營して居たが、一八九八年同大學天文臺創設と共に其天文臺長に就任した。爾來今日迄主に天體寫眞儀を以て熱心に觀測を續けて居る。彗星、小遊星、變光星、新星星雲等の新發見が頗る多い。殊に小遊星に就いては夙に(一八九一年)寫眞的發見法を案出し之を以て今日迄の發見成績世界中他に比肩するもの無く、一九一八年の末迄に既に二三〇箇以

上の發見をした。如斯き驚くべき成功の爲め一九一四年英國天文學會は彼に金牌を贈つた。

(一八六三) (年生現存) (ウオルフ彗星及小遊星を見よ)

ウオルフ彗星 (Wolfs Comet) 一八八四年ハイデルベルヒのウオルフが發見した彗星。木星族で週期は六年九箇月強。此星は其後一八九一年、一八九八年、一九一二年及一九一八年に現はれた。次ぎは一九二五年(大正十四年)の豫定である。

ウオルフ・ライエ星 (Wolf-Rayet Star) 一八八四年巴星のウオルフ・ライエ兩氏に由つて發見された新種の星で、特長はスペクトル中に輝線を多く含む事である。天の河中に頗る多い。一般に新星が退化して此星に成ると信せられて居る。遊星狀星雲との關係も深い。(新星を見よ)

うさぎ座 (Lepus) トレミー星座でオリオン座の南にある。面積は小さい。三等星が四つ、其外皆微光。ガンマ星は三重星で四等星一つと六等星二つある。

うしほ潮 (Tide) 海水面が數時間毎に規則正しく昇降する事である。主なる原因は太陽と月の引力で

殊に月の影響が太陽の二倍以上強い。新月及満月の頃は此の二天體の影響が重なるので大潮となる。此潮は天體の回轉運動に徐々と影響を及ぼすもので天體進化のために重要な役目を演ずる事がダーウイン(G. H. Darwin)に由つて證明された。月の進化論等も之に由つて巧に說かれる。(月を見よ)

うちう宇宙 (Universe) 宇宙の漢語は空間及時間の無限連續を云ふ哲學語であるが、今日天文學上はもつと物質的に考へて纏りのある多數の天體を總稱して云ふ。或は狹義に解して我が銀河系統(Galactic System)を意味する事もある。銀河が多數の天體のレンズ形に密集した一團であると考へたのは第十八世紀の末のウイリアム・ハーシエル氏であるが、今日も此考は略正しい。此意味で銀河系が如何程遠く迄擴がつて居るかと云ふと何分直接に測定の出來ない遠距離であるから諸學者の説がまだ一致しないけれど大體は我が太陽系から何れの方向へも一萬光年程擴がつて居るらしい。但し銀河以外へは此擴がり僅である。故に我が太

陽は銀河宇宙の略中心にある理である。星の分布は中央が最も多いが、之れを遠ざかるに従つて段々と減少する。カプタイン氏に由れば此の宇宙の諸天體は運動の模様から見て二團體に區別される。我が太陽系から之れを見れば一團はアルゴ星座へ他の一團はオリオン星座へ動いて行く様である。之れを二大星流説と云ふ。然るに其の後の研究によればB星の大部分は右の何れにも屬せず殆んど宇宙の中央に接して居るらしい。

近來渦狀星雲及び球狀星團を夫々一種の宇宙系だと見る説もある。(夫々の條を見よ)

うちうかいびやくろん宇宙開闢論(Cosmogony) 宇宙の開闢については昔から其の時代々々の知識に應じて種々の論があつた。大昔には何れの民族も此の宇宙の成因を多くは神話的に説いたが之は我が地球を宇宙の中心と見た頃の説である。近世ニユートンによつて開かれた天體力學は太陽系を宇宙の本體と見たから其處にカント・ラブラスの星雲説が生まれた。殊にラブラスの説は其當時(十九世紀の初葉)の太陽系を完全に説明したので一

時學界を風靡したのであるが、其の後多くの新事實發見と恒星學の發達とによつて信用が薄らいで來た。今世紀の始め米國のチャンパーリン・マウルトン兩氏が微遊星説(Planetesimal Theory)その條を見よ)を提唱したが、要するに之は一恒星の進化を説いたものとしてラブラス説に優るものであるが今日の宇宙全體の説明にはならない。今日の宇宙の開闢論としては未だ定説がない。唯多くの天體の分布及び運動から考へて見ると餘程以前から多くの天體が存在して或は個別的に或は團體的に宇宙引力の支配を受けて今日に及んだといふ一種の多元説(Pluralistic Theory)となる。

うちうくわん宇宙觀(Cosmology) 古來行はれた宇宙觀に凡そ次の四種類がある。

一、原始的地平説。大地は偏平で遠く四方に連り之を若干の天球が蔽ふて居ると云ふ説。之はカルヂャ・エヂプト・印度・支那等最古の文明國に先づ起つたものである。彼等にとつて宇宙の擴がりとは即ち大地の擴がりであり其中心は夫々彼等の住む邦土であつた。

二、不動地球説。地面は球形で宇宙の中心にあつて動かす、其の代りに若干の天球が動くを考へるもので之はギリシヤに發達し長く中世迷信じられた。即ち所謂のトレミーの天動説である。

三、太陽中心説。太陽が宇宙の中心で各遊星及各恒星等あらゆる天體が其周圍りを回轉して居ると見る説で勿論我が地球も其遊星の一つとする。之は即ちコペルニクス以後の唱へた地動説で此儘十八世紀の末迄行はれた。

四、銀河宇宙説。數多の恒星系が集まつてレンズ形に一の集團を作つて居るものが宇宙であるとする説で十八世紀の末ウイリアム・ハーシエルの唱道にかゝる。此説によれば我が太陽は最早宇宙の中心でない。其代りブレヤデス(昴)が中心であるとメドレル(Madler)が唱へた事がある。近年又ウォルキー(Walky)氏がカノープス星を宇宙の中心だと云ひ出した事がある。然し何れも多くの賛成者がない。要するに此宇宙の中心體と云ふ様なものは未だその存否が知り得ないのである。

うみへび座 海蛇座(Hydra) トレミー星座の一。

黄道の南で赤經八時から十五時まで蛇の如く長い星座である。然しアルファ星(アルファード)が二等である外他は皆三等以下の微星である。アル星は長週期變光星中の有名なものである。

ウムフリエル(Umbriel) 天王星の一衛星。一八五一年ラツセル(Lassell)が発見したもの。(天王星を見よ)

ヴルカン星(Vulcan) 水星の運動がニュートンの法則で完全に説明が出来ない事からルベリエー(La Verrier)等が水星の内側に更に一つの遊星があつて水星を引いて居ると考へた。之をヴルガン星といふのであるが未だ發見せられない。一八五九年佛國のレカルポー(Lecapaul)が太陽面を觀察中一遊星が通過するのを見たと言ふのであるが後の人々は之を未だ確めるに至らない。

うるふどし閏年(Bissextile) こよみを見よ。

ウルフ・ベイ(Ulugh Beigh) トルコの天文學者でタメルレンの孫に當る。十五世紀の頃中央アジアのサマルカンド(Samar-kand)天文臺で觀測した。又有名な星表を作つた。(一三九四年生、一四四九年死)